

退職によせて

宮 澤 乃里子

テレビディレクターという元の職業が好きだったので、転職を考えたことがなかった。教える職業に就くことなど思いもよらなかった。それなのに、なんと11年もこの大学にお世話になってしまった。学者ではない異質な存在を温かく迎えてくださり、サポートしてくださった先生方に感謝したい。また、授業を聞いてくれた学生たち、いっしょにビデオ作品を作って「楽しかった」と笑顔で卒業していったゼミの学生にも、「ありがとう」と言いたい。ケーブルテレビの番組「さがまちバンバン」で年間の最優秀賞をいただいたことなどは、いい思い出になった。



腹のたつこともあったし、びっくりしたこともたくさんあった。学生に何を伝えられたかと考えると、自信はないが、いつか思い出して役に立つことがあれば、それでいい。とにかく挨拶だけは、うるさく言った。テレビディレクターの財産は広い人脈と交渉力だけだから、たくさんのゲストを紹介できたことも、よかったと思っている。

「辞めないで」「先生のゼミに入りたかった」と言って来てくれる学生がたくさんいることは嬉しいが、日々変化しているテレビの世界から、もう11年も離れていれば、経験談も古くなっていることを自覚。引退には、ちょうどいい時期かもしれないと思う。

放送局から大学に転職して、価値観の違いに驚かされた。「広く浅く」から「狭く深く」への転換だったのだから。一番違うと感じたのは、時間の考え方もかもしれない。なにしろ1秒単位で仕事をしている特殊な職場に30年もいたので、大学の緩い時間の流れにとまどった。1秒が問題になることがなく、自分で時間をコントロールできることは、居心地がよく、もう、秒単位の職場には戻れそうもない。ディレクターは、子育て中も徹

夜して朝方タクシーで帰ることが多かった。子育て時代に大学勤務であったならよかったのに・・・と思ったが、もう手遅れだ。

テレビは、時間枠が絶対である。番組は、1コマ長くても短くても成立しない。ちょうどどの時間に終わらせなければならない。それで「あと何分？」をいつも気にするクセがついた。どんなにいいカットであっても、時間内に収まらなくては使えない。生放送など、やり直しがきかない場合は、エンドテーマ音楽をちょうど終わるようにスタートしてしまい（空回し）、その音楽の音を大きくして、無理やりにでも終わらせてしまう。時間が余ってしまった時にも、どうにかして埋めなければならないというのが宿命なのだ。

番組内容だけでなく、スタジオや編集室の割り当ても秒刻みで、時間延長はあり得ない。そのため、いつも終了時刻から逆算して行動することが必要になる。あとどれだけ時間があるかで、やり方を即断しなければならない。「ケツカッチン」という後がつまっているという意味の言葉で、いつも追われている。セツカチと早食いは、職業病だと思う。上品に行動してなどいられない、活気に満ちた世界だった。

遅刻も絶対に許されない。その方策として、目覚まし時計が鳴ったら「とにかく飛び起きるしかない」と頭に叩き込んでおくことにした。「もう少し寝られる・・・」と思ったら、二度寝してしまう可能性もあるので、目覚まし時計は、ギリギリ余裕なしの時刻にかけておく。鳴ったら、どこにようとどんな状態でも飛び起きる。顔を洗って、着かえてでかけるだけのギリギリの時間しかないのだから。たいていの場合は、それより早く目がさめるので、逆算して、これなら朝ご飯を食べられる、化粧もできる、あれもできるこれもできる・・・と計算して行動する。時計は、絶対にアナログ。一瞬にして、針の角度で、残り時間を確認できるからだ。私にとって、アナログ時計は逆算の大切な道具なのだ。

放送局では、打ち合わせや会議は、ピッタリの時刻に始まったし、直しがあれば、その場でするのが当たり前で、時間には徹底的にシビアだった。大学に来たら、しだいにその感覚は鈍ってしまった。人間は楽な方に流れるものだ。

定年のある仕事は、終わりがあから逆算できる。でも、人生は終わりは知ることができないから、逆算ができない。エンドテーマの空回しも、まだ早そうだ。これからは、足し算していくしかない。だから、その時その時を大切にしたいと思う。暇だったことがないので、ゆっくりしてみようと思うが、たぶん、すぐに走り出してしまうだろう。予想がつかないことは、面白い。これから、何があるのか、楽しみになっている。

大学での11年間には本当に感謝している。ありがとうございました！